

創刊  
準備号

6

福祉と介護のミニコミ誌

# ふいねず

2017年4月19日発行



(画 amor amigo)

## Topic

特別寄稿 生活支援サービス事業推進のためのガイドライン

連載 心地よい関係性のバランス

私の子育て奮闘記

地域でつむぐ

Information 福祉・介護・まちづくり等のイベント情報欄

# 特別寄稿 生活支援サービス事業 推進のための ガイドライン (2)

山越孝浩

地域包括ケアシステムを構築

するための基本的な素地

(4) できないことに焦点をあてるのではなく、できてほしいこと、能力を持っていることに焦点をあてる

都市には商店など便利がいいが、近隣の人づきあいが希薄である。一方、田舎では商店などがなく、買い物は車で隣の地域まで行かないといけないが、近隣との人づきあいが濃いなど地域によってそれぞれ特徴がある。都市は田舎のいいところに、田舎は都市のいいところにそれぞれ憧れるのである。地域包括ケアではサービスや

建物を新たに作るのではなく、今あるものを変化や統合させ新たな役割や新しい機能に生まれ変わるように変化させることを考えないといけない。

地域においても、民生委員、社会福祉協議会、自治会、JAなど地域に役割のある人や機関がある。そして行政の所管部門の政策によって事業名や活動する人が変わる。しかし地域では事業こそ違うものの、同じような活動をそれぞれ別々にやっている例も少なくない。また、人口が少ない地域になると、その役割が一人何役も担わないといけないということもある。

新たに機能や役割を作ると、人口が減少する地域においては大きな負担となってしまう。だからこそ、これからは無いものを嘆くのではなく地域にある強みを生かし変化させることが大切なのである。

例えば鹿児島県龍郷町では、気になる人の夜の見守りを、夜間にウォーキングしている方々にお願している。夜間の気になる人の

家のカーテンは閉まっているのか、電気が付けっぱなしになっていないか、など気にかけている人への安否確認を、民生委員や近隣の人たちだけに任せていない。地域推進委員会を中心に「夜間の一人暮らしの人の安否確認」という課題をみんなで話し合った。その中で、地域では夜間に健康のためにウォーキングをしている人やグループがあることがわかった。夜のウォーキングのついでに気になる人の家の安否確認をお願いしたのである。

安否確認を新たに近隣に作ることも重要であるが、自らの趣味の延長線上に「おせっかい」をふりかけて「ついで」に安否確認をしてもらうという今あるものに変化(追加)を加え、実現した一例である。

地域において継続した活動を行うためには、無理せず負担に感じず気軽にできることが大切である。そのためにも地域にあるものを伸ばし、無いものはあるものへ変化させ新しい機能を生み出す視点が必要である。

(5) 本人中心の地域包括ケアシステム

地域包括ケアシステムは、システムを構築することが目的ではない。「尊厳の保持」と「自立生活の支援」のために地域に暮らす一人ひとりに見合った支え方を地域でどのように具体化できるかが重要である。あくまでも中心は地域のなかで生活している「本人」であり、制度や仕組みが中心ではない。

2000年の介護保険制度の施行以来「介護の社会化」が推進され、数多くの介護サービスがサービス提供を行い、利用者も増えてきた。しかし、こうした量的拡大の一方で各サービスや地域にそれぞれであった高齢者を支える力(資源)は地域の中で多くは断片化されたままで、統合的には提供されていない。その結果介護が必要な人の在宅での生活の継続は依然として困難であり、本人や家族の望まない選択として、自宅での生活をあきらめ、住み慣れた地域を離れなければならないといった問題

が生じている。こうした課題を地域ごとで取り組み、地域の高齢者の生活を支える仕組みを構築することが必要である。

高齢者の生活を支える仕組みの基となるものは「本人」の声であり、本人がこれまで培ってきた生活の中にあるのである。

そして、その「本人」の声や、持っている力を活かして支える過程で生じる地域の中でのつながりや、行動をとることに伴う結力は本人を支える大きな力となり、地域の大きな財産になるのである。

#### (6) 地域ケア会議は「軒下」で

高齢者本人は何も力がないかと言おうと、そうではない。介護や手助けが必要な高齢者は一見何も持ち合わせていない、弱い立場のように見えるが、大きな力を持っている。それはこれまでの人生の中で培ってきた友人や知人、近隣の本人を気にしてくれる人たちである。この周囲の本人を気遣い、知っている人たちは、元気なときはお互いがそれぞれの力で行き来し、

交流することができた。しかし介護が必要になったり、心身の機能が低下したりする中でかかわる機会が減るとこれまでの関係が薄れてしまうのである。しかし、身近で気にかけてくれる人たちはいる。しかも周囲に「助けられている」と気づかれないようなそっとした支援なのである。数人の方々が気にかけて、支援していただくも、お互い知らなかったり、知っていても深入りしない距離感をもった世話焼きである。

そういった関係をつなぐことは自分自身の存在感を感じたり、取り戻したり、誰かのために何かをしたい、他者に受け入れられている、どこかに所属しているなど、承認されたり、所属している欲求が満たされる。人と人のつながりは本人が生きていく上で欠くことのできない重要な力なのである。この繋がりの方々、関係力は、根拠性が低く、現実的には目に見えにくいいため、見落としがちであるが、この関係力を丁寧に紡ぎ、生かし、本人中心のネットワークを構築する作業が軒下会議である。

軒下会議とは、これまでの専門職が集まって行う担当者会議とは違い、本人を気遣う人や知っている人、心配してくれている人たちと、以前の暮らしを大切に考え、お付き合いされている方の軒先を必要なら井戸端会議の延長のような形で「気になることはないか」「気になることがあればいつでも連絡を」など関係が途切れなないように糸を紡いでいく過程のことである。

自宅や地域での暮らしの継続は、介護サービスだけではなく、それまで本人が培ってきた環境（人・場所・物・機能）の糸を紡ぎ直すことが重要である。

「つなぐ」とはネットワークを作ることであり、基礎となる資源は地域の中に多く存在している。しかし「地域の資源（人・場所・物・機能）」の中には隠れているものも多くあり、草の根的にひっそりと活躍しているものもある。

軒下会議では、地域にある資源を発掘したり、現状の資源をもつと多くの人が利用できるように発展させたり、新たな資源を作りだ

し、それぞれが効果的に活動できるようにネットワークを作るなど資源が有効に活用されるよう確認する場の「個別の地域ケア会議」でもあり、地域の一人ひとりの顔が見える範囲で行われる。ケア会議としては、本人から見て一番身近な会議である。

各地域で出されたなかで共通した課題や、個別ではなくもう少し大きな範囲、課題を検討するのが「地域ケア会議」である。地域ケア会議では個々の本人の顔は見えないが、個別の地域ケア会議（軒下会議）から明らかになった地域の課題や新たな取り組みなど、ほかの地域とも共通するような課題に対して検討する会議である。

地域ケア会議のあり方はあくまでも「生活をしている本人」が出發であり、行政や制度、体制が入口で開催されるものではないのである。

(つづく)

## 心地よい関係性のバランス

第18回 バランスを悪く理解し合う

人づくりにいそしむべきか、しくみづくりにいそしむべきか。これがなかなか難しい問題だ。

障害者自立支援法の廃止が決まって、新しい法律に向けて議論が高まっている。少しでも使いやすい法律にしたいというのは、誰もが願っていることだ。どんなしくみになっていたら、今よりもつと生活に馴染んで、使いやすいのか。そんなことを考えていくと、しくみは本当に大切だと思う。たとえば、かつてホームヘルパーが、ホーム（家）限定のヘルパーだった時代には、障害のある人がヘルパーと楽しく外出するという光景はこの国にはなかった。しくみが変わったことで、日常の風景まで変わった地域がたくさんある。

でも、しくみを議論すればするほど、ちょっとだけ冷めていく自分もいる。「いくら良いしくみがあつたとしても、人が育たなければ実現しないよな…」意地悪な私が耳元でささやくのだ。「これは良いしくみだ」と感動したり、「このしくみは頼りになる」と実感したりすることがないことはないが、「この人は頼りになる」という確信に比べたら、あまり大きなインパクトはないような気がする。福祉の仕事は対人関係の仕事なので、人は仕事のための大切な道具となる。だから、当然道具選びは慎重になる。

実際、どんな支援者と出会うかによって、その人の人生が大きく変わるといえることは、珍しい話ではないし、われわれ支援者も信頼を得るために、少しでも支援技術を洗練しようとする。そして、その支援技術を洗練したいと思う「想い」や良い支援を提供したいと願う「気持ち」が搭載されていることが、この道具のとても重要なポイントなのだ。

それに比べると、しくみはしくみにすぎない。良いしくみに命を吹き込むためには、人の育成が欠かせないということになる。やはりしくみより人なのだろうか。いやいや、それほど簡単な問題ではない。そもそも良いしくみがなければ、良い人を集めることが難しくなる。「この国の福祉のために、一緒にがんばりましょう。お給料は出ませんけど」ということでは、良い人材は集まらない。たとえば「いやいや、どんなに良いしくみをつくっても、良い人材が集まるとは限らない」という声がすぐに聞かえてくるような気もする。

私は、人材育成や、現場の支援技術に非常に関心が強い。だからどうしても、人づくりに気持ちがか傾く。でも、それだけでは決して成功しないということも痛いほどわかつていく。どんなに高い支援技術をも身につけても、どんなに素晴らしい人をつくっても、その人が活かされる環境がなければ、結局は、地域を離れてしまいか、ほかの業種に転職してしまう。これは、どんなに力を注いでも、まるで賽の河原のような場所だ。人を活かすしくみのない場所で、継続的に質の良い支援を提供することは、とても難しいということになる。頼れる人が引越したり病気になるったりして、状況が変わることですべてが白紙になってしまうのでは、安心して暮らすことができない。やはり、しくみは大切なもの

から、自分の不得意分野を理解しようとすることで、相互理解が生まれるような気がする。人づくり

に偏っていてもいいのだ。バランスは悪くてもいいから、しくみづくりにも興味をもつ。もちろん反対もありだ。役割分担は必要なこと。適材適所は重要だと思う。でも、お互いがお互いの考えに無関心で分担された役割をこなすのではなくて、関心をもつて分担する。これこそが大切なことなのだと思う。しくみづくりに関心をもつて、人づくりにいそしもう！と思う。

※この原稿は、Juntos（フントス）CLC発行の情報誌からの転載です。著者と発行者承諾のもと転載しています。

## 大友愛美（おおともよしみ）

北海道生まれ北海道育ち、生粋の道産子です。大学卒業後、最初の福祉現場、知的障害者入所施設では地域と施設をつなぐコミュニティワーカーのような仕事をし、その後は地域で生きる人たちを支える仕事をしました。どちらの現場でも自閉症の人たちとの出会いが多く、たくさん悩み、たくさん学びました。

最近では、共生社会の実現を目指すNPO法人での仕事や、福祉の担い手を育てる場（学校や研修）での仕事をしつつ、自閉症など地域で生きにくい状況を抱えた人たちの相談や支援の仕事もしています。他の多くの人と違っていても排除しない、されない社会の構成員になるためには、学ばなければ、いろいろな人と一緒に暮らす練習が必要なのかもしれないと、感じている今日この頃です。

『びっころ流  
ともに暮らすためのレッスン』

〈1,600円＋税 絶賛販売中〉

※お求めになりたい方は、当法人までご連絡ください。



## 私の子育て奮闘記

スランプに陥った時には：

家庭療育も2年目となると、時折スランプに陥る。

長男は比較的教えたことは、何度か体験・行動すれば身に着くし、関連するものに関しては、自分で習得してくるところがある。それに対して次男は、すぐに結果が出ない。例えば、ボタンができるようになるのに、ある年の夏から始めて次の年の春にやっとできるようになってきた。回復して反復してそれでもできなくて、もう難しいかなと思つたところに、まぐれで出来た？と思うときが、少しずつできて、その少しの頻度が多くなつてやつと身につくので繰り返す。

職場を退職した時には、次男を伸ばすぞーと意気込んでいた自分でも、目に見える結果が出ないと自分自身のモチベーションも下がり、パートの仕事もあるし等という言い訳も入り、次男と過ごす家庭療育の時間もただこなすだけの日々が続いた。結果が出ないから、次々といろんな情報を取り入れ、あれでもない、これでもないという右往左往する日々。気持ち

が空回りしすぎて、まわりが見えていなくて、本人のことも見えていない。

そんな時、たまたま次男とひたすら一緒に過ごす日々があった。多動な次男と

買い物に行くのも一苦勞。だから何日も一緒にいたら、大変だろうという想いが

私の中にちよつとあった。実際、買い物等は結構大変だった。途中でパツとどこかに行きそうになるし、騒ぎそうにもなる。でもそんな中にも、「さあ、立っていきよ！」と声掛けすると、すぐ気持ち

を切り替えてついてこれたり、静かにできる場面があったり、と前より変化していることに気づく。そして、身体を動かすにつれていったアスレチックで、今まで全くできなかったエアリアでほとんどの工程を自分の力であることを目の当たりにする。「すごいね！！かあちゃんびっころしたよ！！すごいすごい！！」と人目をばからず、ついつい声が高くなつてしまふ私だった。次男は嬉しそうな顔をしてアスレチックを続ける。ちよつと難しそうなところも慎重に、でもあきらめずにやっていた。

悩んだらまず行動！とはよく聞く言葉だが、私の場合は悩んだらがつつり本人と一緒に動くという「行動」が一番必要なのかもしれないと考えた出来事だった。これからも何度も右往左往するのだろうか。でも、そのたびに一緒に行動してみよう！ということをしてみたいと思う。

（おとめ）

徳田かつよさんとの出会い

よつてがいんで戸川さんと出会ったのは3年前に近所の夏祭りのお手伝いをした時に知り合った自治会長の亀山さんから相談を受けたのが切っ掛けでした。いつもはニコニコ笑顔の小柄な可愛らしいおばあちゃん、病気で旦那さんを亡くし、一人暮らしになってからは近所にたくさんいるお友達と遊びに出掛けるのが生きがいの元気な方です。

それが最近、民生委員で戸川さんの隣に住む丸山さんの話を聞いて、亀山さんが様子を見に行ってみるといつものニコニコ笑顔の戸川さんですが確かに家が片付いておらず庭にはゴミが放置されています。戸川さんに話を聞くと泥棒が夜な夜な侵入してきて不安だと言うのだそうです。

後日、亀山さんと丸山さんに案内されてよつてがいんに来た戸川さんはお化粧もすっかりと綺麗な洋服をきて来所し、これから遊

びに来ると言ってくれました。

しかし、戸川さんの認知症の状態は進んでいて記憶も、曜日感覚も曖昧で新しく場所や人を覚えるのは大変な事でした。亀山さんと丸山さんと協力をして何回も何回もよつてがいんの職員を覚えてもらう為に自宅を訪ねて声を掛け歩いて送迎を続けました。

しばらくすると、思い出したようにたまたま手作りのサラダ寒天を持っては、よつてがいんに遊びに来るようになるなりそのことを、亀山さんに伝えると戸川さんは歩いて5分くらいの距離のよつてがいんの場所を探して家を何軒も間違えながら必死に訪ねてくれていてと教えてくれました。

1年くらい続き習慣になって来た頃には、戸川さんの近所の方々によつてがいんの職員はすっかり仲良くなりました。遠方に住む娘さんの協力もあってよつてがいんを介護保険を使って利用して貰いよつてがいん職員やケアマネも亀山さん達などの近所に住む方々と

一緒に情報を共有して問題を悩んで解決していく仲間になりました。

戸川さんが鍵を盗まれたから玄関扉を交換するために業者を呼ぶと友達に言うのと、よつてがいんの職員と友達、戸川さんで合鍵の数を確かめて全てあるのを確認したら、戸川さんが近所の橋本さんを泥棒と勘違いして家まで乗り込んだ時は自治会長の亀山さんが間にあって仲裁して、その後からよつてがいんの職員が謝りに行き認知症の説明をしてきたりしました。

民生委員の丸山さんは、近所だからと曜日の分からない戸川さんのゴミを捨ててくれ、月に何回かある婦人会の集まりにも戸川さんを誘って送り迎えしてくれています。料理が出来なくなった戸川さんは近所のコンビニで朝、晩の食事を買って食べていますが、よつてがいんの休みの日はお友達に車で迎えにきてもらって大好物の麺類を食べに行きます。

戸川さんは認知症の状態にあり

ますが、話合いやお盆のたびに必ず孫を連れて帰ってくる遠くの町に嫁いだ娘さんがいます。近所の友達、民生委員、自治会長、ケアマネ、よつてがいんの職員に見守られています。

そんな戸川さんが大事にしている地域の人達や友達と少しでも長く生活し続けて行ける様な関わりがどれほど出来るのかをさぐりさぐり考えながらよつてがいんの職員は地域の人達と支え合って過ごしています。

(よつてがいん代表 粕屋裕之)



## Information 福祉・介護・まちづくり等のイベント情報欄

4月10日までに、編集部へ届いた情報です。詳細は、各情報の連絡先にお問い合わせください。また、情報欄への掲載を希望する方は、編集部までご連絡ください。

### 《第25回 街CAFE さくら》

#### 【5月の催し物】

#### 「ビンゴ大会」

日時：2017年5月21日（日）

13：00～16：00

会場：東金市東金 1060-6

（SUNFLOWER 1F内）

参加費：100円（お茶代）

問い合わせ先：社会福祉法人ゆりの木会内  
認知症カフェ担当 平賀・笠原 (0475-50-8111)

### 《穂垂るの会》

介護している方々が集まって日々の苦労話等を気軽に本音で話し合う会です。

日時：2017年5月11日（木）

13：30～15：30

会場：ふれあいセンター 2階 創作室

経費：200円（昼食代）

主催・連絡先：穂垂るの会・井上

(090-7171-1701)

### 《ちば地域密着ケア協議会主催・講演会》

開催日時：平成29年6月2日（金）15：00～16：30（受付：14：45～）

会場：千葉県経営者会館・4階会議室

基調講演「平成30年改定を見据えて地域密着型サービスのこれから（仮題）」

講師：櫻井 宏充氏（厚生労働省老健局総務課介護保険指導室 室長補佐）

対象・定員：千葉県内の地域密着型サービス事業所の職員、市町村職員、その他関心のある方（50名）

参加費：非会員1,500円／資料代：会員・行政関係 500円

お問い合わせ先：ちば地域密着ケア協議会・大石

(TEL：043-244-2601 / FAX：043-244-2602)

フリーダイヤル つなぐ ささえる  
0120-279-338  
よりよいホットライン

24時間 通話料無料

心の悩み、学校生活、子どもの悩み、セクシュアルマイノリティの悩み、法律の悩み、人権関係の悩み、DV・性暴力の悩み、外国人住居の悩み、仕事の悩み

CLICK!

## お知らせ

東金駅から大網方面へ徒歩5分の住宅街に、小規模な保育園が開設されました。

名称は、「まちの保育所いくりん」です。国が実施する「企業主導型保育事業」の補助を受け開設されています。エリアや職業に関わらず、一定の条件を満たしていれば、どなたでも利用できます。

スタッフは全て保育士。所得による料金の変更もありません。興味のある

方は、ぜひお問い合わせください。

◆定員 12名

◆対象 0～5歳児（就学前まで）

◆営業日 月～土（週6日）

◆休業日 日曜日、年末年始

◆時間 午前7時30分～午後6時30分

◆内容 通常保育

◆料金 月額約20000円～

〈お問い合わせ先〉

NPO法人ちば地域生活支援舎

（53・3630 / 太齋・並木）



**まちの保育所 いくりん**

- 安全な木質空間
- 安心の職員配置
- 優しい価格設定

**子育て世代の福祉職・介護職を応援します！**

少人数ならではのアットホームな雰囲気の中、お子様一人ひとりに寄り添った保育を行います。こだわりの木質空間で豊かな感性を育みませんか？

**園児募集中**

**5月1日(月)開園！**

〒千葉県東金市東金429アドバンスアベニュー1階

保育所は、無垢の木材をふんだんに使った空間に仕上がっています！



## サポート会員募集

「ふれーず」の編集・発行を応援いただけるサポート会員を募集します。

応援いただける方は、ぜひ、ご連絡ください。

### 【内容】

会費：1口3,000円（※個人・団体）

期間：年度単位

### 【連絡先】

特定非営利活動法人ちば地域生活支援舎  
総務・企画課（0475-53-3630）



### ＜表紙画 amor amigo さんの紹介＞

イスラエルに縁ある夫、ペルーに住んでいた妻、17歳差の夫婦ユニット。山口県萩市で私たちが娘と暮らすのは、毛利の殿様が参勤交代で通った成り道に面した築200年の古民家です。そこで、イラスト業と並行しつつ、祖父から注いだ画材屋、重厚な梁が残る古民家BAR、ピタサンド専門店、アート教室などを営んでいます。

発行元：ふれーず編集部  
千葉県東金市東金425-2（鶴嶺の家内）  
TEL：0475-53-3630  
編集責任者：宮下・太齋  
発行部数：500部

5月5日は「こどもの日」。「こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する」ことが趣旨らしい。前半の、子どもの人権や幸福を図る趣旨は理解していたが、母に感謝する日とは…改めて感謝！（To）